日本産業看護学会 第3回学術集会

「実践科学」の追求を目指して
産業看護学会の今後の発展に期待

久保 善子

はじめに

2014年９月５日～６日，日本産業看護学会第３回学術集会が産業医科大学において開催されました。本学術集会は，９月２日～４日に福岡で開催された第21回アジア国際労働衛生学会（Asian Conference on Occupational Health；ACOH）に併せた開催で，福岡出身で未就学児子育て中の著者にとっては，日程・立地ともにとても有難い学会でした。また，これまで２回の学術集会は１日間のみの開催でしたが，本会より初めて２日間の開催となりました。

プログラムの内容も，会長講演・特別講演・基調講演・シンポジウム・演題発表に加え，セミナーやラウンドテーブル形式を取り入れた参加型の企画がありました。参加者に“実践活動に有効な手立て”を一つでも多く持って帰ってほしいという企画側の思いが伝わったサービス精神旺盛の内容でした。参加者は約400名とのことでした。

日本産業看護学会について

まだまだ歴史も認知も浅い学会なので，まず日本産業看護学会についてご紹介させていただきます。日本産業看護学会は，2012年12月に「学問としての産業看護学の発展と高度な実践能力・実践方法の開発により，社会に貢献すること」を目的に設立されました。産業看護に関連する学会は，日本産業衛生学会の産業看護部会や日本地域看護学会，日本公衆衛生看護学会等があります。しかし，産業看護を専門領域として確立し，社会的な承認を得るためには，自立した学会活動が必要であることから，本学会が設立されました。米国では1915年に米国産業看護師協会（American Association of Occupational Health Nurses；AAOHN）の前進の団体が設立され，来年のボストン大会で100周年が開催されるという長い歴史があります。米国に比べると産業看護職として自立した３年目の学会ですが，今後は，日本看護系学会協議会への加盟や，看護系諸学会との相互交流や連携を通じて，学術的な発展を目指しています。そして，人々の健康と生活の質の向上のため国・社会に必要な提言を行うことが最終的な目標となります。また，本学会は，１．日本産業看護学会の開催，２．日本産業看護学会誌の発行，３．産業看護教育（看護基礎教育・大学院教育）の推進，４．産業看護研究の推進，５．産業看護学の体系化，６．国際交流，７．産業看護倫理に関する事項，８．産業看護学の発信・普及，９．産業看護組織強化に関する事項等，目標を達成するために必要な事業を実施していきます。

メインテーマは，産業看護の深化と進化――実践と研究の融合

本会のメインテーマは，「産業看護の深化と進化――実践と研究の融合」でした。印象に残った会長講演とシンポジウムについて，ピックアップしてご紹介します。

くぼ よしこ
東京慈恵会医科大学医学部 看護学科 地域看護学 講師

会長講演

本会の会長は，２名体制で行われました。まず，最初に，久留米大学の西田和子先生が「産業看護の進化の方向性」と題して，本邦の産業看護の歴史的な変遷および諸外国の産業看護教育との比較の中から本邦の課題を明らかにされました。特に課題として挙げられていたことは，「産業看護職の教育」についてであり，「産業看護の基礎看護教育への体系的導入の必要性」と「卒後の継続教育や大学院教育の必要性」について述べられました。また，Think globally, act locallyという言葉が印象的で，いかに諸外国の良い点を見習い，本邦に活かしていくかということや，いかに本邦の産業看護の強みを伸ばしていくかについて，考えさせられた講演でした。

次に，もう一人の大会長である産業医科大学の中田光紀先生が「産業看護の深化を目指して」と題して講演されました。これまでの研究結果を基に，労働時間と睡眠時間と重度のうつ状態との関連性等をワークライフバランスに置き換えて，説明されました。また，ホワイトカラーエグゼンプションが労働者に及ぼす影響についても説明をされ，研究でエビデンスを示すことで政策に意見できること，最終的には法律を変えることができるという言葉に私は痺れました。産業看護職は，日々の活動において，健康診断，過重労働，保健指導，健康教育……，さまざまな情報を取り扱っています。しかし，情報に埋もれてしまい，客観的な評価や分析ができない状況にあります。見落としがちな情報を研究や科学的根拠に基づく実践に繋げることの大切さを再認識したのと同時に，得られたエビデンスを基に，国を動かしていけるような研究に携わりたいと思いました。

写真１　シンポジウム

写真２　サワーセミナー
講師お勧めのサワードリンクを飲みながら，「実務を研究にどう“深化”させるか」を考えました。

シンポジウム

シンポジウムでは，四人の先生がご登壇されましたが（写真１），紙面の関係上，二人の先生のご紹介をします。一人は，東京大学大学院の島津明人先生の講演です。「ワーク・エンゲージメントに注目した個人と組織の活性化」と題して，管理監督者研修やセルフケア研修のコツについて講演されました。管理監督者研修では，研修で取り上げられる知識とスキルが，メンタルヘルス不調となった部下への対応だけではなく，それ以外の従業員の活性化や健康職場の実現にも効果的であることを伝える必要性があることや，部下の職務効力感を高めるためのスキル（役割の明確化，仕事の意義の伝達，スモールステップ，ポジティブフィードバック等）について教授することも有効であることが述べられました。さらに，セルフケア研修では，ストレスや精神不調について知り，これに対応する技術のほか，職務効力感に繋がる内容（例えば，コミュニケーションスキル，問題解決スキル等）も研修に加えることが望ましいことや，最近注目されているジョブ・クラフティング（従業員が与えられた仕事の範囲や他者との関わり方を変えていく行動や認知）は，ストレス対処だけではなく，従業員自身が自らの仕事をやりがいのあるものに変えうる可能性があり有用であること等が講演され，これまでの知見を基に実践に活かせる具体的なコツを教授されました。

また，四日市看護医療大学の畑中純子先生は，「産業看護の過去，現在そして未来へ」と題して講演されました。産業看護職の進化は，時代の流れとともに業務内容の拡大を図り，健康課題に対応できるようにその役割を進化させてきたが，産業看護の深化は，産業看護職一人ひとりに委ねられている部分が大きいと述べられ，今後，進化・深化していくためには，産業看護職一人ひとりの学びを，すべての産業看護職の学びへ昇華させていくことが必要であり，それは研究により達成されると講演されました。また，産業看護の深化と進化を妨げている要因として，産業保健に関する知識と技術に関する研修への参加は職場で認められるものの，看護サービスの質を高めるための研究を支援する体制が整っていない職場が多く，研究に費やす時間の確保の問題や研究への拒否感のある産業看護職も少なくないこと等，多くの障害があることについて述べられました。

本会の演題登録は16演題でした。第１回８演題，第２回13演題でしたので，会を重ねるごとに，演題数は増えていますが，演題数が少なかったのがとても残念です。看護は「実践の科学」と言われています。実践と研究は乖離するものではなく，密接に繋がっていること，また産業看護を発展させうるためには実践と研究は欠かせないものであることを本会で再認識しました。今後，現場で活躍される産業看護職の参加者や演題発表が増えていくことを願っています。

おわりに

第３回学術集会の参加報告とともに，日本産業看護学会についてもPRさせていただきました。第４回学術集会は，2015年11月14日～15日に島根県立大学において開催されます。できたてホヤホヤの学会の発展に期待しつつ，私自身も研究や学会の運営等を通して，現場で活躍する産業看護職や社会に貢献できるように，尽力していきたいと思いました。

安全・健康リスク管理推進に役立つ **16 ステップ**

産業保健専門職のための生涯教育ガイド

付録：日本産業衛生学会 産業保健専門職倫理指針

日本産業衛生学会 生涯教育委員会 編

1 産業保健活動を職場に組織する
①産業保健活動の課題を理解する
②産業保健活動に必要な情報を収集しニーズを把握する
③産業保健方針と計画を確立する
④産業保健組織を確立し維持する

2 職場の健康リスクの総合評価と対策を推進する
⑤健康有害要因を評価する
⑥労働者の健康影響を評価する
⑦職場ごとに必要な健康リスク対策を選定する
⑧健康リスク対策の実施を推進する
⑨健康増進活動を促進する

3 連携して産業保健活動を充実させる
⑩作業適性と病後復職を支援する
⑪救急およびプライマリーケア体制を確保する
⑫環境マネジメントを促進する
⑬科学的研究とその普及に貢献する
⑭産業保健活動を監査する

4 専門能力をいっそう向上させる
⑮産業保健専門能力を向上させる
⑯コミュニケーション能力を発揮する

A５判並製１１６頁
定価：本体価格４７７円＋税

〒 216-8501
川崎市宮前区菅生 2-8-14
電話：044-977-2121(代)
FAX：044-977-7504
E-mail：shuppan@isl.or.jp
HP：http://www.isl.or.jp/

公益財団法人
労働科学研究所